

カード時代・カード破産

坂本武人

カード化の歴史的必然性

いま、われわれの囲りにはカードが氾濫し、カードなしの生活は考えられないほどになっている。同時に、カードをめぐるさまざまな問題が生れ、新たな社会問題になる傾向を示している。なぜ、このような状況が生じたのであろうか。その原因をたずね、カード社会のメリット・デメリットについて考察してみよう。

ドイツ歴史学派の経済学者の一人、ブルーノ・ヒルデブランドは、一五〇年ほど前に、経済社会は物々交換から貨幣交換に、そして信用交換へと段階的に発展すると述べている。この説によるならば、いま、われわれの囲りで急速に進行しつつある信用交換と、それをスムーズに展開さ

せるためのカード化は、経済の発展段階に呼応するものであり、歴史的必然の産物とみることができるといえる。

自分で飼育した牛を市場に連れて行き、それを欲しがる人を見付け出し、相手が自分の欲している米を持つていることを確認しなければ取引が成立しないといった物々交換の不便を回避するために人は、いつでも、どこでも、何とも交換できる財貨（貨幣）を発明し、広くそれを使用するようになった。この貨幣の登場が交換を増大させ、経済の発展を促がす原動力の一つとなった。

しかし、貨幣による交換の発達には、生産の目的をそれまでの消費のためから利潤のためへと転化させ、生産本位の経済体制を確立せしめた。

生産本位の社会では、利潤の拡大のために大量生産機構

を確立させ大量販売、大量消費を必然のものとした。しかし、ここでの消費は生産活動の成果として獲得入手した所得、しかも、巨額な資本の利潤部分を控除した所得に依存せざるを得ず、生産とのギャップを生み、慢性的な過剰生産を余儀なくさせた。

信用交換は、このような貨幣交換による経済発展の停滞要因を是正する役割をもって登場したものである。

売り手は、売りたいものが一杯あり、買い手も、のどから手が出るほど欲しくても現金がないために取引が成立しない貨幣交換の不便や不都合を緩和する信用交換は、過去の働きの成果である所得のみならず将来の働きを担保にして消費の拡大を促すものであり、貨幣交換社会に固有の慢性的な生産過剰（社会的矛盾）を緩和させることになる。

カード時代は、このような信用交換を是とし、その積極的な推進を図る経済機構のもとに登場したものである。

クレジット時代、カード社会の実現

わが国において消費者信用取り引きが本格化するようになったのは、一九七一年（ドルショック・ニクソンショック）以降である。この年、外国為替相場のフロート化による円高ならびに輸出規制に対応するための経済の再編成が進められ、国内経済の寡占化に拍車をかけることとなった。同

時に、輸出の減少による景気の停滞からの脱皮を図るため、内需拡大政策が押し進められ、その一連の流れの中で消費者信用（クレジット）産業が登場し、脚光を浴びるようになった。

通産省産業政策局消費経済課の指導の下に（株）日本割賦協会が行った消費者信用の新規信用供与額の推計調査によると、一九七一年は二兆九二九〇億円、七二年は三兆二四四〇億円であり、対前年比一〇・八％の増であった。翌七三年には四兆五二〇億円となり、対前年比も二四・九％と急増している。その後も着実な伸びを示し、七三年を一〇〇とした場合、九〇年には八四五、八と八・五倍になっている。ちなみにこの間の民間最終消費支出の伸び率は四五・五である。このため、消費者信用供与額の民間最終消費支出に占める割合は、七三年の一・二・九％から九〇年には二六・八％になっている。平たく説明すると、七三年には全ての生活費の八分の一弱をクレジットで払っていたが九〇年にはこれが四分の一以上になっているのである。

消費者信用取引の増大につれてクレジットカードの発行枚数もうなぎ昇りに増加している。わが国においてクレジットカードによる取引が開始されたのは、一九六〇年一月であるが、その急激な普及は、カードの発行条件資格基準がゆるやかになり、若者たちの加入が容易になるまでの時間を要した。

すなわち、消費者信用取引の本格化に遅れること一〇年、一九八三年頃からようやく順調な伸びを示すようになった。

わが国におけるクレジットカードの普及状況をみると、その導入後、二〇年余の歳月を経てようやく五〇〇〇万枚の万台に乗った（一九八三年三月末、五七〇五万枚、（株）日本クレジットカード協会調べ）のであるが、その後、一億枚の万台には四年後の八七年に（二億一〇三六万枚）、一億五〇〇〇万枚台にはさらに三年後の九〇年（一億六六一二万枚）へと急速な増加を続け九一年三月末には一億八六九六万枚に達している。この間の年平均伸長率は一六・〇％となっている。それゆえ、現在では優に二億枚を越え、成人一人当たり、二枚以上、一世帯当たりでは五枚以上の保有枚数になっていると推計される。

カードによる購入も八一年には二兆七九一五億円であったものが九一年には二兆五二八七億円へと四・一倍になっており、消費支出に対する割合も一・九％から四・七％に膨れ上っている。一般に耐久消費財などの普及率にはずみがかかるターニングポイントは五〇七％ゾーンとされていることから、クレジットカードによる購入は、あまり遠くない時期に飛躍的に増加し始め、やがて日常のショッピングにおいても財布から紙幣やコインを取り出す回数よりもカード提示とサインが多くなり財布そのものも姿を消すよ

うになるとも考えられる。

クレジットカードの便益性

クレジットカードは、経済の発展段階に即して登場したものであり、市場における交換の便益性を高め、経済の一層の発展を促す機能によって広く社会に受け入れられつつある。

われわれ消費者にとっても一枚のカードが現金に代わる代金支払い（決済）手段として、また、信用供与（代金後払い）手段として、さらには金銭借入れ（キャッシングサービス）手段としての機能を果してくれるために極めて便利である。これさえ所持していれば、取引動機・予備的動機・投機的動機を満たすために保持すべきものとされてきた現金・通貨を持ち歩かなくても良く、欲しいと思った商品をサイン一つで、いつでも、どこでも、また、いくらでも買うことができる。また、消費税導入によつてはん雑になった一円単位の支払いも、いとも簡単に済みますこともできる。さらに、現金を必要とする場合は、いつでも借入れができる。それゆえ、クレジットカードは、利用者にとって、まさに、現代版“打ち出の小槌”といふべきものである。“打ち出の小槌”を手にした場合、よほどの自制心あるいは計画性をもったものでない限り、あれもこれもと欲求

を肥大させ、必要以上に使いたくなり、気が付くと身の回りにガラクタの山ができて、その中に埋まる事になる。打ち出の小槌の場合は、しかし、最悪の場合でも、ガラクタの山に埋もれることで済むのであるが、クレジットカードの場合は、便利、便利と使っているうちにガラクタの山と同時に借金（多額債務）の山にも取り囲まれることになる。

しかも、それは、カードを発行し、使用を促がすことによって販売促進を図り、利潤の確保を求める業者側の巧みな戦略に誘導され、いつの間にか多重・多額の債務者となり、気が付いた時には身動きがとれなくなっているのである。

とりわけ、ここでは好奇心に富み、誘惑に乗り易く、しかも、春秋に富んでいる若者がターゲットにされる可能性が高く、事例、A、Bで示したようなことがあちこちで起きている。（『月例国民生活』平成二年五月号）

事例 A

月収手取り十六万円
営業マン・二十七歳
交際費、飲食費など
クレジットカードで
三年間で十七社から
一千万円の債務

事例 B

月収手取り十二万円
クレジットカードで
次々と買い物のOL
二年後七百五十万円借金
債権者数二十五社

多重債務と自己破産

多重債務に陥いるものを、国民生活センターのホストコンピュータと都道府県、政令指定都市の消費生活センターに設置された端末機を結ぶPIO・NETに寄せられた相談件数をみると、最近急速に増えている。すなわち、八九年度を一〇とした場合、九〇年度では二〇六、九一年度は一二月末までで、三二・一・二となっている。また、これを年齢別にみると、二〇歳代が四一・四%を占めている。

返済能力を越えた多額の借金を背負った多重債務者は、相談によって適切なアドバイスを得ることができず、消費者破産（自己破産）を裁判所に申し立てることになる。これも最近、著しく増加しており、八六年から九〇年までは一万件そこそこであったものが九一年には二万三五〇〇件となり、本年九二年度に入っても五月までに、すでに一万五九一人に及んでいると報じられている。

このように多重債務あるいは自己破産が増加する背景にはバブル経済の泡をかき立てるため、スーパリーチとかニューリッチとまではやし、高級志向、快適志向の貴族的消費社会の一員になろうとすすめる世論の誘導、あるいは、返済能力を十分に調査しないでカードによる販売拡張にしのぎを削り続けたクレジット会社、あるいは、それを支え

た銀行、流通企業、メーカーの経営の在り方を指摘することが出来る。もちろん、自己破産は、一種の「借金の棒引き」であり、クレジット会社は債権を喪失することになるため、その原因となる多重・多額債務を強要するはずはないとする見解も成り立つ。しかし、専門の弁護士によると、いままぐ破産した方が良く見なされる人、すなわち自己破産予備軍が五〇万人も存在することであり、その大多数は、自己破産の申し立てをすることなく、無理に無理を重ねて支払いを続け、結果として企業の収益活動に奉仕をしているのである。このような状況の下で二、三万人の自己破産者が出たとしても、企業にとっては決して不利とはいえない。

多数の多重債務者を輩出させているもう一つの要因としては、クレジットローンの金利の高さをあげることが出来る。担保なしに借りられるキャッシングの金利は、会社によつて多少の差はあるが、大体三〇%前後である。最も高いところでは三九・六八%もある。(九一年二月一日現在)貸し出しは、各社二〇万円から三〇万円と制限しているが、中には五〇万円、一部一〇〇万円というところもある。分割払いの金利は各社一五%前後となっているが、高価な商品をクレジットで買わせ、支払いができればキャッシングサービスを利用させるといふ方式を繰り返しているうちに、多重・多額債務が次々に生まれることになる。

しかし、何といつても、大切なことは消費者自身がクレジット時代、カード社会の流れを主体的に捉え、それに対処する能力を身に付けることである。

カード社会への消費者の対応

クレジットは、将来の収入を先取りして現在の生活をエンジョイさせてくれる。そしてクレジットカードは多様な機能をもつて経済的な自由を拡げてくれる。それだけに消費者信用の利用は高まり、カードの保有も拡がっている。

クレジットの利用率を京都市経済局の『市民消費生活白書』(平成三年版)でみると、五一・三% (平成二年一〇月調べ)と過半数を越えている。中でも、二〇歳代、三〇歳代の若年層の利用率が高く六〇%を越え、四〇歳代、五〇歳代の中年層の五〇%台、六〇歳以上の老年層の三〇%台を大きく上回っている。また、クレジットカードの保有率も七二・五%と四分の三近い比率になっている。ここでも、若年層は八〇%を越えており、中年層の七〇%台、老年層の五〇%台に差を付けている。しかし、カードの使用状況をみると、「使わない」とするものが二五・六%にも達している。このようにカードを所有していても使用しないとするものは、貯蓄広報中央委員会の全国調査によると六三・七%にも達している(平成三年七月調べ)。これは、クレジット

カードを所有する場合、利用者自身の必要度の認識にもとづくよりも、利用をさせたいとする側の誘いに応じ、持つていけば便利だという漠然とした利用意識にもとづくものの多いことを示しているともみることが出来る。この非主体的な所有意識のもとで、広告や宣伝やセールスマンにあらは友人・知人に、その利用の便利さを教え込まれ、それに応じて利用するようになると、今度は、繰り返し利用するクレジット中毒患者となり、利用に歯止めのきかない多重債務者となる。とくに、若年層にこの傾向が強い。

(但)日本クレジット協会の調べによると、二〇歳代のクレジット利用者の平均債務額をみると、この年齢層の平均年収(三四四万円)を上回る四〇〇万円以上が三六・三%もあり、平均貯蓄額二四六万円を越える三〇〇万円以上に至っては五四・五%と半数以上に達している。これらは、すでに述べた自己破産予備軍と位置づけることができる。

自己破産は負債の大きさに堪えかね、その生活経営に齟齬を来し、結果として生存権・生活権を失う危機にあるものを救済するための法的な措置であり、国民の当然受くべき権利を保護する方策の一つといえる。しかし、生活自助を基本原則とする市民社会にあつては安易に被保護者としての地位に自らを位置づけるべきではない。そして自己破産が、単なる「借金の棒引き」として済まされない重要な意味をもっていることを認識すべきである。

市民社会の構成員として生活するためには、少くとも取引相手の巧みな戦略に組み込まれ、その言いなりになつて自己破産に陥ることを遠ざけるべきである。同時に、貨幣取引から信用取引へと大きく変化する経済社会の流れの中で自らの意志(計画)と努力(実行)によつてクレジット機能を生かし合理的な生活を実現する新たな生活科学の樹立が必要である。当面クレジットの新規利用が所得の二五%を越えることのないよう、あるいはローンの支払額が平均貯蓄率を上回ることに留意すべきである。

同志社女子大学の家政学部は、人を物(金)に従属させる「資本の論理」に支配されることのない生活者自身による人が人として生きる意味を問う「生活の論理」に導びかれた新しい学問体系の確立を図るべく努めている。その成果を期するとともに、意のある方々の協力と励ましのアドバイスをお願いしたい。

(女子大学教授)

シチリアからの眺め

落合 仁 司

この夏、シチリアに行った。マフィアによって、ファルコーネ検事やボルセリーノ判事が爆殺されてまだ一月という時期に、わざわざ行かなくてもよさそうなものであるが、どうしても見ておきたいものがあつたので強行した。案の定、シチリアは厳戒体制下にあつた。泊まったパレルモのホテルは、客よりも警官の方が大勢いたし、街中にファルコーネと共にマフィアと闘おうと書かれたステッカーや横断幕が張り巡らされ、反マフィアの集会も開かれているようであつた。こんな処に家族と共に来たのはやはり無謀であつたかと思う間もなく、妻はシオルダーバッグをひつたくられてしまった。厳戒体制など何処吹く風、小犯罪者は健在である。

警官と小犯罪者が多いことを除けば、シチリアの生活は

快適と言つてよい。何処までも青く澄み渡つた地中海の空、夏の強い陽光と寡雨によって熱く乾いた大気と大地、涼風爽やかなオリーブの木陰、新鮮な魚貝類と子牛・子羊そして葡萄酒。シチリアは、オリーブ・葡萄・柑橘類の宝庫でありパスタ用小麦の穀倉である。羊や牛の移牧も漁業も盛んである。しかし、農業だけでは豊かに生きられないのが近代の宿命。シチリアもまた例外ではありえない。

イタリアでは、聖母被昇天の祝日である八月一五日の前後に一週間から三週間、場合によっては一カ月の夏休みが取られる。夏休みというイタリア人の誰もが海や山のリゾートで過ごすように思われがちであるが、リゾートに行くのは都会に生まれ育つたイタリア人だけで、地方出身者は故郷の田舎に帰ることが多いようである。お盆の頃に帰

省する、いつか何処かで見た風景ではないか。シチリアでも農業だけでは暮らせないので、昔はアメリカ、今はイタリア北中部の都会に人々は働きに出る。出稼ぎという形が多いようである。アグリジェントからパレルモに帰る列車の中で、帰省を終えてローマやミラノに戻るのであろう若者の一群に出会った。列車はシチリア島のほぼ中央を南から北へと貫いて行くのであったが、停車する駅ごとに一群の若い男達とその母か妻かあるいは恋人であろう女達が別れを惜しんで抱擁している姿が印象的だ。ローマ行きの列車との乗り換え駅テルミニ・インメレーゼに着く頃には、列車はそうした若い男達で一杯になっていた。その中の一人が聞いて来る。「イタリアは好きか。」私は答える。「そう、そう、もちろん。」

私は、シチリアに、イタリアの南部問題を見に来たわけではない。むしろ、その逆である。最近では多くの人々に受け入れられている考え方であるが、西欧文明が今日の姿を取るに到ったそもその始まりは、一二世紀における西欧の地中海への進出と、それに伴うアラビア・イスラム文明およびギリシア・東方正教文明との大規模な接触にある。西欧はこのとき始めて、ギリシア哲学の最高峰であるアリストテレス形而上学とセム語族の宗教の徹底である東方神学に真つ正面から遭遇したのである。ギリシア形而上学の威容と東方神学の魅惑を前にして、西欧がどのように自ら

のアイデンティティーを形成していったのかという話は、たとえば拙著「トマス・アクイナスの言語ゲーム」に譲るとして、当時、イスラム文明および東方正教文明と西欧との主な接点とは三つあった。一つはイスラム文明による被征服地を再征服し、アリストテレス哲学のアラビア語からラテン語への翻訳の一大センターとなったイベリア半島のトレド、二つは東方正教文明との交易をほぼ完全に独占し、東方神学を初めとしたギリシア語文献に比較優位のあったヴェネツィア、そして三つはイスラム文明と東方正教文明の影響を等しく受け、それらを北方ゲルマンの伝統とも融合させつつあったシチリアのパレルモである。

トレドとヴェネツィアはすでに見ていた。トレドの街のたたずまいは、八〇〇年後の東洋からの旅行者の目にも、イスラムの痕跡を鮮烈なまでに見せ付けるものであったし、トレド大聖堂の異様は、そのイスラムと西欧とがいかに激しく葛藤したかを想像させて余りあった。ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂に入れば、ビザンティン帝国の首都コンスタンティノープルもかくやと思わせる金色モザイクの丸天井が見られる一方で、ヴェネツィアの街は、装飾ゴシックが運河に映える、まごうかたなき西欧の都市である。それではパレルモは一体どんな街なのだろうか。私はパレルモとその近郊にあるモンレアレの大聖堂をどうしても見たかった。

なるほど社会哲学（これが私の「専門」である）は、文献による研究が中心である。思想は、わけても外国の思想は、書かれたものによつて知る他はないということであらう。しかし私は、その思想を育んで来た風土を、わけてもその思想が人々の生活を捉えて離さない街を見たいと思う。もちろん、思想と風土を安易に結び付けることは危険である。たとえば、唯一神教は砂漠に生まれ育つたのであるから、その一つであるキリスト教を受け入れた西欧は砂漠のような風土であるなどと言う人もあるが、これは短絡である。しかし思想と街は深い処で繋がっている。あるいは同型の構造を共有していると言つてもよい。その構造を見るためには、書齋に籠もつて文献を読む作業と共に、その街へと旅を敢行しなければならない。その街へ旅することによつて思想は楽しいものになる。そう、思想は生活になる。哲学者は街に出よう、ただし書を捨てないで。

こうして私はパレルモに来了。モンレアレの大聖堂に入つた。予想していたとはいへ、イスラムと東方正教の建築と裝飾がこれほど見事に融合しうるものなのか、そこには正しくアラビア・ビザンティン様式と呼びうるモザイクの天井と壁面が眩い光を放っていた。その回廊を含めイスラムと東方正教の影響は圧倒的であり、後陣横の小部屋を除けば、ここが西方キリスト教の寺院であることを忘却させるほどである。この印象はパレルモの街全体についても当

てはまるかもしれない。この地はここが西欧であることを忘却させるようなその辺境である。それゆえにこの地はイスラムと東方正教の圧倒的な文明が西欧を覚醒させるインターフェースとなりえた。なるほどパレルモは地中海の三大文明の接点に違いない。このことは、シチリア料理にもシチリア人の身体そのものにも明瞭に見て取れたのであったが、その話はまた別の機会に譲ろう。

ラテン西欧世界は、ギリシア人とアラビア人による地中海の二大先進文明を、ヴェネツィア・パレルモ・トレドを接点として吸収し、自らのアイデンティティー、自らの思想を形成していった。しかし自前の思想の形成は、同時に教師からの自立の過程でもある。西欧は、自己を確立すると共に、地中海に背を向け始める。いわゆるルネサンスである。西欧のアイデンティティーの確立と共に、トレドもパレルモもやがてヴェネツィアも文明の接点としてのエネルギーを失つていく。ヴェネツィアとそしてある程度まではトレドも、かつての文明間接触の場としての高揚を、観光都市となることによつて今日に生かしている。しかしパレルモは、貧しいイタリア南部の一州都となり、かつての栄光に生きる観光都市にすらなりえていない。ほとんどスラムと化した旧市街とマフィアの横行である。

西欧が自己を確立し地中海に背を向けていく過程はさらに進行する。その出発点であるルネサンスを先導したフィ

レンツェでさえ、この過程から取り残されていく。このとき西欧が眼差しを向けていたのは自らを挟むもう一つの海すなわち大西洋であり、その先にあるアメリカであった。この意味において、フィレンツェ・ルネサンスの絶頂を生きたロレンツォ・ディ・メディチの死とコロンブスによるアメリカ発見が、奇しくも同じ一四九二年であったことは象徴的である。この年こそ、西欧が地中海から大西洋へとその眼差しを一八〇度転回する元年だったのである。

それから五〇〇年、一九九二年は言うまでもなく今年である。この二〇世紀末の時点に立つと、かつて地中海と西欧の関係が辿った道筋を、いま大西洋とアメリカの関係が辿っている様子が見えてくる。一二世紀以来西欧は、東方正教とイスラムという二大先進文明に地中海という海をインターフェースとして接触し、それを吸収して自らのアイデンティティーを確立した。ヴェネツィアやパレルモやトレドは、そうしたインターフェース上の都市である。一六世紀以来アメリカは、西欧という先進文明に大西洋という海をインターフェースとして接触し、それを吸収して自らのアイデンティティーを確立して来た。アメリカ東海岸の都市たとえばニューヨークは、そうしたインターフェースの上にある。一方西欧は、大西洋を介してアメリカと接触した一六世紀以来、地中海には二度とその眼差しを向けなかった。西欧大西洋岸の都市たとえばロンドンの勃興と、

地中海都市ヴェネツィアの没落はこの時に始まる。それではアメリカは、この二〇世紀末、大西洋に背を向けつつあるのだろうか。

アメリカが、自らを挟むもう一つの海すなわち太平洋に進出するのは一九世紀末あるいは二〇世紀である。それ以来アメリカは、太平洋をインターフェースとしてたとえば日本と接触して来た。アメリカ西海岸の都市たとえばロサンジェルス の興隆も、東京が大阪を追い抜いたのもこの時期である。これだけを見れば、二〇世紀以降アメリカは大西洋から太平洋へ東海岸から西海岸へと重心を移動していくという予想もあながち的外れではないように思えて来る。ニューヨークは没落し、やがては東京が文明の中心になるかもしれないという予想である。

しかし、ちょっと待って欲しい。西欧が地中海を介して東方正教とイスラムに接した時あるいはアメリカが大西洋を介して西欧に接した時、その時の西欧あるいはアメリカはほとんど文明の処女地と言ってよい状態にあった。要するに未開野蛮の地だったのである。しかし、日本が太平洋を介してアメリカと接した時、日本はお世辞にも未開野蛮とは言えない状態にあった。日本はすでに、東シナ海あるいは南シナ海をインターフェースとして中国文明さらにはインド文明と接触し、自らの文明を形成しきっていたのである。日本にとつての東シナ海・南シナ海は、西欧にとつ

ての地中海とほぼ同様の役割を担っている。いずれの海も、ユーラシア大陸の中心部に興った大文明をその東西の辺境に接続するインターフェースの役割を果たしているからである。日本と西欧の違いは、日本に接続された大文明が東方ユーラシア型（中国文明・インド文明）であつたのに対して、西欧に接続された大文明が西方ユーラシア型（ギリシア文明・ユダヤ文明あるいは東方正教文明・イスラム文明）であつた点のみである。もとよりこの違いは決定的であるが、しかし日本がアメリカと接触する時点において、少なくとも西欧がアメリカと接触する時点と同等の文明状態にあつたということに変わりはない。日本文明は、アメリカ文明と接触する以前に、その骨格をほぼ完成させていたのである。

したがって、太平洋を介しての日米接触は、先進文明と後進地域の遭遇という分類には当てはまらない。二〇世紀の日本は、一二世紀の西欧や一六世紀のアメリカとは全く違ふのである。それゆえ、二〇世紀末がアメリカの没落と日本の勃興の転回点であるという言説もにわかには信じ難い。ニューヨークさらにはロサンジェルスが没落して東京が文明の中心になるなどという言説はかなりの眉唾なのである。

むしろ私はこう見ている。二〇世紀における太平洋を介した日米接触は、一見するとアメリカから日本への文明の

伝播のように思われるが、長い眼で見ればその方向は逆である。すなわちアメリカ文明は、西方ユーラシア文明を地中海を介して受け取った西欧文明を大西洋を介して受け取ると共に、東方ユーラシア文明を東シナ海・南シナ海を介して受け取った日本文明を太平洋を介して受け取ることにより、いよいよ自らの文明本来の姿を現してくると思へたいのである。言い換えればアメリカ文明は、大西洋と太平洋という両面のインターフェースにおいて接触する東西双方の文明を吸収することにより、新たな地球文明として自らのアイデンティティーを形成しつつあるように思えるのである。このような考え方の成否は、アメリカ文明における東洋的要素の評価に掛かっている。それについては今後の研究に待つ他はないが、いずれにせよこのような考え方は、アメリカ文明を地球最後の文明と見るに等しい。それゆえ反発もあるう。しかし敢えて価値判断を述べさせて戴くならば、地球の未来を日本に委ねるよりは、アメリカに委ねるほうが遙かにましではなからうか。

（大学経済学部教授）